

第12回 蘇東坡は弟に諭されて故郷を発つことになった

——手ずから荔子を栽れいしえて我の帰るを待つ

2017年10月30日（月）。

「あのさあ、トバー君のお父さんは奥さんの家との関係を絶ち、お父さんが亡くなった後でもトバー君はそれを守ったんだよね」

「それはこの前、当人が話していた通りで、お母さんの実家の程ていの家と和解したのは、蘇東坡が60歳くらいのところだったといえます。絶縁状態は30年以上も続いたのですよね。お父さんの決めたことを忠実に守ったということなのでしょうか」

「昔のことだから、父親の言いつけは絶対だったってことなのかなあ。でも、守ればいいってもものでもないよね」

「蘇東坡ほどの人ですから、何かしらの考えがあったのかもしれないね」

「そんなもって、ちよっと思っちゃったんだけど、叔父さんだったら、もしかしたら、そっちの家のほうの人を主人公にしたような小説が書けたりするんじゃないのかなあ。興味ない？」

「どういうことでしょうか？」

「ボクもそういうところがあるからわかるんだけど、功成り名遂げた人の成功談って、叔父さんはあんまし好きじゃなかったりするじゃん。勝手にしてくれって感じでしょ。だからトバー君よりはそっちの家、恐竜よりはトリテイロドンだよ、きつと」

「えーと、それって、何でしたっけ？」

「あれっ、知らなかった？ トリテイロドンは、いつとき繁栄したじゅうききゅうるい獣弓類の末裔で、恐竜の全盛期には衰退して草葉の陰でひっそりと暮らしていたんだ。その親類筋から苦節ん千万年の末に哺乳類が進化してくるんだけど、トリテイロドンは滅びちゃうんだよね。悲しくない？ そんなで、トーパー君が帰郷したときに、お姉さんを虐待したような悪いヤツらは仕方ないとしても、程の家の人だというだけでみんなから相手にしてもらえなかったっていうのはどうなんだろう。町じゅうがわいわいトーパー君を迎えていたなかで、どんな気持ちだったんだろうかなあつて、叔父さんも気になるよね」

「どうなんでしょう、とくに考えたことないですけど」

「そっかなあ。でもさあ、先月、叔父さんもあの映画を見たんだよね。見ないは

「ずないよね、同窓生が出てるんだから」

「ああ、『茅ヶ崎物語』ですか。いちおう見ましたけど。イノ君も見たのですか？」

「トバー君と故郷について話したりした後だったから、自分の町のことかわかるようになったりするのかなあって思って、見に行ったんだ」

「で、どうでした？」

「おもしろいか、おもしろくないかって聞かれたら、はっきりしないって感じかな。サザンオールスターズの桑田佳祐の同級生っていう人が進行役みたいにしてずっと出てたんだけど、それが、なんか、いかにもおっさんって感じでさあ、叔父さんも同窓生なわけじゃん、やっぱおんなじおっさんなかまなのかなあって、そんなことばっか思って。要するに、とにかくおっさん臭いっていうのが最大の印象ってとこかな」

「それは映画の主題とは関係のない感想のようですねえ。加山雄三と桑田佳祐という音楽界のビッグな存在がどうして同じこの町から出たのか、そして、その2人以外にも何人も芸能人がやはりこの町から出ているけれども、それはどうしてなのかというのが一つの大きな主題だったですよ。その点についてはどうだったですか？」

「やっぱ、わかったような、わかんないような、はっきりしないって感じかな。加山雄三と桑田佳祐はたしかに同じ中学校の出身なんだけど、それって単なる偶然でしかないんじゃないのかなあって、ボクははいまも思うな。映画では、海とか神とか性とかというのをキーワードみたいにして、この町をあちこち歩きながら、そのキーワードの周辺をうろろして、『ほら、だから、わかるよね』みたいな感じにもっていきこうとしていたけど、なんかはつきりしなかったなあ。浜降祭が

はまおりさい

重要なポイントとして、祭りのシーンがスクリーンいっぱいに映し出されたりすると、ボクも子供神輿をかついだり、町内会で祭りの手伝いとかしているから、「おお」ってな感じになったりしたけど、それとサザンの音楽が結びつくとは、あんまし思えなかったなあ。祭りの熱狂は全国どこにだってあるんで、この町がとくに芸能の町だという結論を導く助けにはならないと思うんだよなあ」

「筋がぴしっと通っていないと納得できないというのはいかにもイノ君らしいですね。映画なので、がちがちの理屈でかためるより、ふわっとしたイメージで包み込むくらいでいいのではないのでしょうか」

「叔父さんはあれで納得できたの？」

「わたしとしては、映画のもう一つの主題のほうがより気になったですね。つまり、高校時代の桑田が自分の音楽に目覚めるところがドラマ仕立てで描かれてい

た部分です。そういうのを見ると、わたしが高校生であったころのことを思ったり、それからの人生を振り返ったりと、そんなことをしてしまいうけですよ。つまり、おっさんとしての感慨にふけるってわけです。それこそ単なる偶然でしかありませんが、桑田とは同じ小学校、同じ中学校に同じときに通って、わたしが就職してすぐのときにサザンがデビューして、わたしがなかなか仕事になじめずにいたところに、サザンは一気にビッグネームになったのです。まったく別世界の話なので、うらやむとかそんな気持ちは毛頭ありませんでしたが、人生というのは何かのはずみで大きく異なるものになったりするのだなあとの思いはありました」

「まさにそこなんだよ。トバー君は科挙と制科に合格して、いわばサザンのように一気にビッグネームになったわけでしょ。サザンはいまもビッグな存在で、

叔父さんのほうはといたら、会社員を途中で辞めて、いまはだれもアクセスしてくれないホームページにだれも読まない作品をアップしているわけだよね。いっちゃなんだけど大きな違いじゃん。だから、程の家の人たちの気持ちが変わるんじゃないのかなあって思ったんだ」

「そういうことですか。でも、わたしは桑田とはもともとから縁がなかったので、絶縁されるような目にはあっていませんけど。それでも、帰郷したときの蘇東坡の気持ちと、程の家の人たちの気持ちと、どちらのほうがより推測可能かと問われたら、蘇東坡はあまりにも雲の上の人なので、後者のほうだということになるでしょうか。サザンの茅ヶ崎球場での2度の凱旋ライブを、わたしはこの地元の片隅で迎えたわけですし……」

「そんでさあ、サザンの地元はこの町に何か特別なものがあるんだったら、もし

も桑田が別のところで生まれ育っていたなら、サザンの音楽は存在しなかったってことになったりするんだらうか？ それはどうなんだらう？ トーバー君が眉^ひ山^{ざん}でないところで生まれていたらどうなんだらうか？ そういう『もしも』は考えでもあんまし意味がないのはわかってただけだ

「サザンについていえば、それこそ、映画で描かれていたような、中学の同窓生に呼ばれて、文化祭でライブをして、自分の音楽に目覚めるといったことはおこらないってことになるので、もしかしたらサザンの音楽は存在しなかったってことにもなるのではないでしょう。蘇東坡についてはなんともわかりません」

「もしも、ボクがこの町でないところで生まれ育っていたら、こんなボクではなかったんだらうか？ 別の町だったら、それこそボクがメジャーデビューってことは……やっぱないだらうな。結局のところは、100パー同じではないにして

も、基本的にはあまり違わないんじゃないのかなあって気がする。平凡な人間はどこで生まれ育ってもやっぱ平凡でしかない……」

「イノ君はこの海でサーフィンをすることをとても大切にしているわけですよね。よその町で、とくに海のない町で生まれ育っていたら、きつとかなり違うことになっていたのではないでしょうか」

「海がなければ、山に登っていたかもしれないなあ。それでもボクはやっぱボクで、たいして変わらないってことだったりするんじゃないのかなあ。今朝は台風が去った後の海に行って、やっぱこの海はいいなあって、正直思ったよ。でも、よその海に行きなれていたら、その海がいいって、きつと思うはずだよね」

「そういうことでいいのではないでしょうか。たまたまこの町にいるから、この町が故郷だと思う、それしかないのではないでしょうか。この町に何か特別なこ

とがなくてもいいのですよ。この町にたとえ特別なものがあっても、みんなが桑田になるわけではないですしね」

「だとすると、結論としては、この町の人には一人一人にそれぞれの『茅ヶ崎物語』があり、別の町の人にはそれぞれの『〇〇物語』があるってことだろうか。

なんかざっくりしすぎて、しかも常識的すぎて、自分でいっていながら、この結論にはあんまし得心できないけどね」

* * *

——いきなりの質問だけど、トバー君は「平穏生活権」というのを聞いたことがある？　そういうボクも、ついこの間、知ったばかりなんだけど。

① それは、自分が住みたいと思う場所で、字義通り、平穏な生活を営む権利がある、ということではなかったでしょうか。私もたまたま最近、何かで読んだばかりですが、福島第1原発の事故によって、故郷から長期にわたって離れることを余儀なくされた方々が、国と東京電力に対して起こしている損害賠償請求の訴訟において、注目されているのがこの「平穏生活権」なのだ聞いています。

——トバー君って、900年以上前に死んだ中国人だとは思えないよなあ、そんなことも知ってたんだもの。

それでね、前回、故郷についてあれこれ話をして、ボクには故郷意識があんましないってことをいったんだけど、そんなときにすっごく重大なことを忘れていたというのを、しばらく後になって気づいたんだ。それってまずいんだよなあ。な

にしろ、うちの叔父さんときたら、ボクがテキストにいったことまで克明にホームページに載せてしまうから、ボクの愚かさがそのまま記録されてしまうんだ。失敗したと思っただけでなくよくよしてたんで、だから、今日は汚名挽回、名誉返上と意気込んで、いきなりそのことを出しておきたいんだ。トバー君が知らなかったら、得意になって「平穩生活権」を説明する気でいたんだけど、知ってたんじゃ、釈迦の耳に念仏、閻魔に説法だったね。

㊦ あなたは前回、過疎地や難民を思えば、生まれた土地で生活できているのはありがたいことだというようなことをおっしゃっていましたが、原発の事故について言及しなかったのが失敗だったということでしょうか。

——そうなんだよ。あれから6年余り経って、ボクも記憶を風化させてしまった1人になっていたというのが、すつごく恥ずかしくて……なんか、やんなっちゃったんだ。それで、2週間くらい前だけ、福島地裁で判決が言い渡されたというのをニュースで知って、これはちゃんと知っておかないといけないと思って、新聞とか読んで、「平穩生活権」を知ったんだ。いまでもすかあゝみたいに遅いけどね。その判決では、原発の事故によって「平穩生活権」が侵害されたことに対する賠償を「ふるさと喪失慰謝料」として支払うようにと、裁判所は判断したんだよね。故郷で平穩に生活するという、ホントにあったまりまえのことに、ちゃんとした権利があるっていうのは、なんかすごいなあって思ったんだ。



昔の中国には無論「平穩生活権」などという概念は全くなかったわけですが

れど、故郷には必ずや平穏な生活があつて、それが人間存在の基盤として極めて重要であるとの強い意識というか理念がありました。

それを最もわかりやすく表現したのが陶淵明とうえんめいです。陶淵明は41歳のとき、官職を辞して郷里に帰り、そのことを「園田の居に帰る」という詩に詠みました。その詩によると、陶淵明が郷里に帰ったときに見たものは、

我が敷地は十畝はばかり、

我が家は八ないし九の部屋。

軒の後ろを榆や柳が覆い、

座敷の前に桃や李が並ぶ。

遠くよその村が心を誘うようにぼんやり霞み、

近く我が村では心に寄り添うようにもやもやと煙が上る。

奥の路地で犬が吠え、

桑の木の上で鶏が鳴く。

庭に雑多な塵はなく、

部屋はからっぽで何も無い。

久しく私は籠の内に閉じ込められていたけれど、

こうしてまた本来の自然に帰ることができた。

——へーえ、ちよつとわかるかも。そこに描かれているのがまさに平穏な生活ってことだね。故郷に帰ればそれがちゃんとあるんだ。原発事故はそういうのを奪ったんだよなあ。



詩の途中の「よその村が」というあたりは、日本語ではうまく写せなかったので、説明的に長く訳してみました。原文はこうです。

曖曖あいあいたり 遠人の村（曖曖遠人村）

依依いはいたり 墟里きょりの煙（依依墟里煙）

曖曖アイアイ、依依イイイと中国語でゆったりと発音すると、廬山ろざんの麓にあつた陶淵明の村のありさまが目の前に浮かんで来るかのような気になります。

陶淵明という人は、国家の重職を担った曾祖父のようになりたいとの志をもつて学問に励み、懸命の努力の末にようやく小さな官職を得たのですが、心に適わ

ないところがあり、いかに貧乏であろうとも平穩な生活こそを我は求めると、故郷に帰りました。いまの詩も含めて、陶淵明の文学は、後世の中国人のみならず広くアジアの人々に大きな影響を与えました。人間精神の基盤に関わる重大なことを主題にしていたからでしょう。

——前回、トバー君の先祖について聞かせてもらったときに、宋による全国統一がなされた後でも、先祖伝来の場所を離れないで、官に仕えようとしなかったっていつてたけど、それって自分たちの村での平穩な生活を維持しようとしたってことだよ。でも、どんな田舎の村に引っ込んでいても、国の政治が影響してくるってことだ。あるじゃん。それによって、平穩な生活が無残にも破壊されてしまったりもするんだよね。

㊦ 国家の支配力は、陶淵明の郷里にも当然ながら及びました。詩では「本来の自然に帰ることができた」と歌ったわけですが、帰郷後も陶淵明は国家の動きに無関心でいることはできませんでした。

陶淵明の時代から数百年が経ち、遥かに中央集権化が進んだ宋の時代には、全土がくまなく国家の強い支配力のもとに置かれ、山の奥のそのまた奥に隠れても、国家と無縁に平穏な生活をするというのはまずもって不可能になっていました。ですから、我が先祖が郷里に隠れていたと書いたのは、やや理想化した表現だと理解していただきたいと思えます。

——あのさあ、ついこの間、ヘンな総選挙があつて、投票したところで何も変わ

らないし、雨で行くのも面倒だしなあって、棄権したくなっちゃったんだけど、ボクらが政治家なんかくだらないって見放しても、国のほうはボクらを見逃してはくれないんだよなあ。結局はソンすることになっちゃうんだよね。だから選挙には行ったけど、なんかむなしい感じがした。それでも、選挙権があるだけまじってというのはわかっている。

それで、突然ですが、ここでジョン・クレアを持ち出すと、こんなふうな詩があるんだ。「平穏生活権」などというものがカケラもなかった時代に、それが破壊されることに対する怒りを歌っていると読むことができ、なんかすごいと思わない？

最愛の榆の老木よ、おまえは時代の変化が陰悪になるのを見た。

それまで、変化はおまえを一度も傷つけ、損なうことはなかったけれど。

……

おまえは雨に降られている偽善者たちに何度も雨宿りの場所を与えたが、かれらは権力を握ると、おまえをけっして保護しようとはしなかった。

……

雨雲が消えると、おまえの木陰にこのように報いた。

根元に斧を打ち込んで、おまえを切り倒したのだ。

……

自由という言葉は、正義の名において、

他の者を虐待する奴隷化の道具をあらわす欺瞞の言葉となっている。

その言葉は、素朴で正直な人々を権力によって

搾取する尊大な愚か者たちのための認可証になっている。

このようにして「困い込み」が生じた——破壊がその指針であった。

(鈴木蓮二訳、181ページ)

いまのは「切り倒された榆の木」という詩から、ごく一部をつまみ食したんだけど、「榆の木」というのは困い込みで失われた入会地の象徴なんだ。故郷そのものの象徴といってもいいと思う。その「榆の木」は、自由の名のもとに切り倒されてしまったんだ。それがつまり「困い込み」なんだ。

自由を標榜する偽善者によって素朴で正直な人々が搾取され、故郷を奪われもするという構図は、原発事故とどこが異なっているんだろうか？ ジョン・クレアから200年近くも経って、「平穏生活権」がいわれるようになって、まだこ

んなことがあるっていうのは、どうしてなんだろう？ メチャクチャ、ヘンだよ
ね。でも、それが人間社会というものなのだって、冷たく言い放って終わりって
いうのはいやなんだよなあ。

㊦ 人間の権利についての考察は進歩しても、人間の力が大きくなった分、故郷
の喪失はより大規模に不可逆的に進むようになったということがあるのでしょうか。
原発事故はその最も残念な事例で、地球温暖化はその最も大規模な事例ものでは
ないでしょうか。海面が上昇することでかけがいのない故郷である島を失いかね
ない人たちがいるにもかかわらず、自由な経済活動を何より優先して、地球温暖
化を無視する人々は、ジョン・クレアが罵倒する偽善者よりもさらに卑劣だと言
うべきではないでしょうか。我が母国においては、国の強大な権限のもとで、「困

い込み」と類似のことが大々に進行中です。その一例が2009年に完成した三峡ダムです。100万人以上の人々が強制移住を余儀なくされ、私が長江の上り下りで見た峡谷の風景は失われてしまいました。

——たまには熱くこういうことを議論してもいいんだらうけど、これくらい話をしておけば、ボクが反省をしたという証拠にはなると思うんで、そろそろ前回の続きに移ってくれてもいいかも……。

Ⓣ 予定されたプログラムがあるわけではないので、今日は「平穏生活圏」を徹底的に論じても構わないのですが、それにしても、台風が接近中のいまに、ここでこんなふうののんきに話をしていてよろしいのでしょうか。

——たまたまボクがこの店にきたら、台風もこつちにきちやつてみたいで、なんか迷惑なんだよなあ。でも、意外と早く抜けてしまいそうだよ。いま置いたハマグリがちょうどいい感じに焼けるころには雨も止んだりするかも。だから、ゆるゆるゆると前回の続きをどうぞ。

㊦ この前は、故郷の家に二つの棺を持ち帰ったところまでお話しました。それから2カ月間は葬儀の準備に明け暮れまして、一番の大仕事が墓所の拡張工事でした。

我が父は我が母を葬ったときに、いずれは自分自身も入る場所を母の隣に用意しました。父はその後正式な官員になったために、その地位にふさわしい墓にす

るにはそれなりに手を加える必要がありました。また、父は私の妻をその近くに葬るよう命じていましたので、それも含めて墓所を広げて整備することになったのです。長く子孫が父と母を偲ぶことができるようにしたいものだと、弟と相談して、周囲に松などを植えて景観を整えることもしました。

私は実は、植林、特に松を植えるのを得意としていました。少年時代によく山に入り、やたらと歩きまわったり、道士の小屋を訪ねたりするだけではなく、山の仕事をする人の手伝いもしました。そのときの経験から、松を植えるのは十月から冬至までの間がいいということを知っていましたので、どの場所に何を植えるのかを決めた上で、本格的な植林は埋葬を終えてからということになりました。

——ふーん、木の植え方とかも知ってたんだ。ちょっと意外かも。だったら、シ

ルバー人材センターに登録したら、いろいろ仕事があるかもね。ちょっとアルバイトして、パシオスでもユニクロでもいいから、もう少しましな服を買ったら、トーバー君も案外とカッコよくなるかもね。

① いまお話している時よりもかなり後、私が57歳ぐらいだったでしょうか、ある若い人が、松の植え方を教えてほしいと訪ねて来ました。学問について問われることはあっても、松の植え方を請われるのは珍しく、会ってみたのですが、実際にはさほど松に関心があるわけではなかったもので、戯れの詩を書いて与えませんでした。

君は雪の中で松の実を拾い、

松の植え方を学びたいと言う。

山に松を植えるには、

草や茨を踏み分け、泥の中を歩き、

露に宿らなければならぬ。

植えてから、十年も世話を続け、

春雨の降るころになって、ようやく、

竜の髭くらいの大きさになったのを見ることが出来る。

君に尋ねよう、

楊の枝を土に挿したらどうなるか。

翌年にはもう花を付けるばかりに大きくなるだろう。

楊の花というものは、頼りなくふわふわと飛び去るだけだ。

かつて私が山野を拓いて植えた松は、

いまごろはその根元に立派な松茸が獲れるまでに育っているだろう。

町に住む君に、

果たしてどれほどの心構えがあるのかい。

——ははは、その人は、トバー君が松を植えるのを得意としていたっていうのをどこかで聞いて、それをうまい話の糸口にして会おうとしたんだろうね。有名な人のトバー君に会えたのをただ自慢したいだけの、いかにもふわついた感じの人だったのかな。

松茸かあ。松茸って、いまが旬だよね。この炭火で焼いたら、いい匂いがしておいしいんだろうなあ。ボクなんか、生まれてからまだ松茸を焼いて食べるなん

てことしたことはないし、これからもないだろうなあ。

① いまの詩ではわかりやすいように松茸と訳してみました。もとの詩では茯苓びくりようです。松の根に寄生する優れた薬効のあるきのこです。松茸もいまはひどく高価ですが、茯苓はそれよりもさらに価値あるものです。

墓所の整備で一番苦労したのが石材集めでした。4月に帰郷して埋葬は6月と予定したのですが、必要となる石材の量を見積もると、6月までに揃えて工事を終えられるかはかなり微妙でした。一族の者や馬正卿ばせいけいが東奔西走して大いに難儀したので、我が郷里の人々が見ている印象に残ったのでしよう、その後一つの伝説が生まれ、語り継がれるようになりました。

——もしかして、河童が助けてくれた？ それとも、豚のお母さんの池の鯉が竜に変身して石を運んでくれた？

㊦ 伝説によると、埋葬の日が迫って来ても、石がまるで集まらないので、私が困り果ておりますと、遠い親戚の老人がひよっこり顔を出し、

「どうだんべ。こうなったら、おらんとこのあっちの山の、あの隠居君子様に頼むより仕方なかつぺえな。お坊ちやまがじかにお頼みなさったら、隠居君子様も、たぶん『うん』と言ってくれっぺえよ」

「その隠居君子様というのは誰のことでしょうか」

「知らんかね。おらんとこのあっちの山のあっちの奥におつて、山のことなら何でも思いのままにできるっちゅうお人じゃよ。山の獣も、山の鳥も、山の霊も、

みんな隠居君子様の号令に従うつちゆうけんども、聞いたことなかつぺか」

老人がとにかく熱心に勧めるので、ほかによい手立てもなく、ものは試しで、老人に連れられて「おらんとこのあつちの山の奥」へと向かったのですが、それは山の奥のまた奥で、山中で泊まりを重ね、ようやくたどり着き、大きな門を叩いたのですが、いくら声をかけても返事はなく、

「こいつはあかんか。きつと狩りにでも出たんだべな。気長に待つしかなかつぺえな」

老人は座り込んで呑気に煙管きせるでふかふかふかし始めたのですが、私は期日が迫っているのに何日も無駄にしたかとかかなり苛立つて……

——ちよつと、待って。なんで煙管が出てくるの！ カップめんをズルズル食べ

てくれたほうがまだましかも。時代考証っていうのに、少しは気をつかってほしいんだけど。

㊦ 私は苛立ちを鎮めようと、あたりを改めて見回しますと、山の奥にこのようなところがあるとは思えないようなところで、田畑が遠くまで広々と連なり、その奥に滝がかかり、その彼方に白雲が浮かぶという、画のような景色で、しばし見とれておりますと、わずかに馬の響きが聞こえたかと思うと、たちまちあたりに人馬が満ち、年のころなら二十歳ぐらいの精悍な青年が私の目の前に現れ、馬上から軽く会釈をしました。

「この人でござえますよ」

隠居君子と聞いて、私は勝手にかなり年配の人物を想像していましたので、意

外な思いでその青年に挨拶をし、我が名を告げました。

その人は馬より降り、

「このような不細工な恰好では御挨拶いたしかねますので、まことに恐縮ながら、ここでいまま少しばかりお待ちいただきとうございます」

1人だけ門の内へと入って行きますと、他の者たちは私のために床几やら大きな傘やらを並べ、座るところを作ってくれた上に、茶まで用意してもてなしてくれました。

そうこうする間に、隠居君子は昔の貴族が平生着ていたようなゆつたりとした服を身に付けて現れ、ひと通りの挨拶をすませますと、

「ただいま食事の用意をさせております。どうぞ中に」

門の内側には、外からは全く想像もできない豪壮な建物がひしめき合い、その

うちでひととき大きな御殿に通されますと、たちまち食事が運ばれ、いま獲つて来たばかりという肉やら魚やら茸やら山菜やらの料理と、山で作ったという酒が並べられました。私は、ご存知の通り、酒はさほど強くないので、盃を干す前に急いでここに来た用向きを言いますと、

「それしきのこと造作もありません」

相手は笑つて、仔細を尋ねることなく、まずは飲むようにと勧められましたので、盃を口にしますと、それはごく強い酒でたちまち酩酊し、いつしか眠りこけて、ふっと気づいたときにはすでに朝になっていました。隠居君子は早くも狩りに出かけたとのことで、私は家の人々に送られて山を下ったのですが、昨日の約束について尋ねますと、人々はこのこするばかりで、これといった返事はありませんでした。

「あれはどういうことだったのだろうか」

一緒に行つた老人に尋ねると、

「なんの心配もなかつぺえよ」

私は夢でも見たような心地で、半信半疑というよりは、疑いが八分以上でした。

それから日は容赦なく過ぎ、隠居君子からはなしのつぶてで、墓所ははなはだ不完全なまま、とうとう葬儀の前の日となつて、気苦労でろくろく眠れずに朝を迎えますと、外で馬正卿が、

「いますぐにお越し下さい。石材がみごとに揃いましてございます」

大声で呼ぶのが聞こえました。馬正卿は墓所の近くに泊まり込んで、未完成であつても葬儀は行うための最後の準備をしていたのですが、馬を飛ばして行つてみますと、墓所のあちこちにきれいに切り整えられた石材が積まれています。

「昨夜は何もなかったのです。夜明け前にふと目が覚めると、このようになっていました。いつ誰が積んだのやら、全く気づきもしませんでした」

「もしかして、これはあの隠居君子殿がしてくれたのだろうか」

「ざっと見たところ、ちょうど必要な量がそれぞれの場所に置いてあります」

私はいぶかしく思いながらも、山の奥に向かって頭を下げ、心の内で隠居君子に礼を言ったのでした。

「しかしながら、今日一日しかありませんから、これをいかがしましょうか」

「とにかく、できることをやってみるしかあるまい」

私は石材に手をかけましたが、人間一人の力ではぴくりとも動きませんでした。

馬正卿と思案に暮れていますと、にわかにあたりが騒がしくなり、馬にまたがつてあの隠居君子が現れ、その後何百何千という人が続き、隠居君子がさつと

扇を振うと、人々が石材に取り付き、たちまち所定の場所へと運ばれ、見る見る組み上げられ、土がかぶせられと、あれよあれよという間に工事は完了し、隠居君子がにこっと微笑むと、その瞬間に全ての人々が消えてしまいました。

——へーえ、そうなんだ。そんなふうな伝説が生まれたのは、トバー君がお墓を立派にするためにかなり頑張ったからなんだろうね。相当な無理をしたのかな？

㊦ 昔の中国では、親を葬るために自分の持っているもの全てを使ってしまうというのも珍しくはなく、伯父が亡くなったときに従兄弟達は実際にそのようにしましたし、馬正卿は何も財産がなくて思うように葬ることができなかったのを生

涯の痛恨事としていました。私の場合は、幸いにも、帰郷に必要な費用を皇帝から頂戴しましたので、葬儀を終えて何もかもなくなってしまふということにはならずすみましたが、隠居君子ならずとも、眉山県の人々の手助けなければなかなか思うようにはできなかつたのです。

——つまり、いまみたいな伝説ができたのも、トバー君が地元で人気があつたつてことなんだろうね。たぶんそうなるには、前回聞かせてもらったように、お祖父さんとか先祖の人たちが地域の人たちといひ関係を築いてきていたからつてことがあるんだろうね。故郷に生きるつていうのは、そういうことなんだろうね。

でも、何代にもわたる人間関係がきいてくるつていうのは、いいときにはよくても、逆に息苦しいつてこともあつたりするのもなあ。トバー君のお母さん

の実家にはみんなが背を向けたわけだよ。その家は地位も財産もあったからそうされてもあまり困りはしなかったのかもしれないけど、力のない家がそんな目にあつたら大変だよ。そういうのって、地域社会におけるいじめ、村八分つてやつだよ。そういう人間関係にしばらくられるのがいやで、地域から都会に出て行つたつてこともきつとあるよね。ボクなんか、学校でひどく息苦しい経験をしたけど、地域全体がそうだったら、耐えられないだろうなあ。

㊦ 葬儀が終わると、それからは喪中でありますから、夏から秋、秋から冬、冬から春と、ごく静かな日々を過ごし、取り立てて語るべきこともなく、足掛け3年の服喪の期間がそろそろ終わりとなる熙寧元きねい(1068)年初夏へと時間を飛ばすことにいたしましょう。

その頃になりますと、私は二つのことに心を悩ませるようになり、2人の助言に得て夏の終わりに事を決めたのでした。

——ん？ その二つと2人を当てるクイズを出題するのかな？ そうだなあ、2人のほうならならわかるかも。これまでに登場している人物だったら、きっと弟さんと馬正卿さんだよ。新たにこれから登場する人物なら当てようがないけど。

Ⓣ 正解です。悩んだ二つのことのうち、たぶん一つはおわかりになるでしょう。

——それがヒントになるね。都にまた行くかどうかでしよ？ だって、帰郷するときに、そのようなことを言ってたもの（📖 第10回）。ボクって、意外

とちゃんと話を聞いてるんだよね。

それで、今夜はここでもう1回、ジョン・クレアに登場してもらおうかなあ。
結構好きな詩なので。

私は都会の世を見、願わしいものをただ一つも見いだせず、

あなたの平安へと、自然のままの木陰、原野に佇まう静寂へと

満足してふたたび飛んでゆくところだ。

ああなおも私に与えてくれ、土地を耕す私の宿命を、

そして、私がかつて持っていた静かな生活を、

また、終日の労苦から解放される日曜日の慰めを。

私は。パン屑を食べるつもりだ、そして自分は恵まれていると思うのだ。

(森松健介、60ページ)

これはね、ジョン・クレアが26歳のときに、初めてロンドンに行き、帰って来るときに詠んだものなんだ。詩人として大都会に迎え入れられることが叶わなくて、詩で「あなた」と呼びかけている故郷の生活にもどる決意を詠んでいるんだよ。

㊦ 先程私が紹介した陶淵明の詩と共通するところがあるように感じます。

——ジョン・クレアが生まれたヘルプストンはロンドンから北に150キロくらい離れたところで、トーパー君の眉山県と比べたら都にずっと近いんだけど、当

時はかなりの田舎の村だったんだろうね。ボクはジョン・クレアの生家を見ておこうと、学生時代に一度だけそこに行ってみたんだ。生家がちゃんと残っていて、感動したよ。ただ車がビュンビュン走る道に面していて、ジョン・クレアの時代とは雰囲気がるつきり違ってしまったんだろうけど、その道から離れると、この町よりはずっと田舎の感じがしたよ。

ロンドンからそこに向かう列車に乗ったときに、ボクはこの詩を読み返したんで、なんかロndonは好ましくないとこらだという思いがボクにも移ってしまった、ヘルプストンから帰った後で、ロンドン観光を楽しむ予定だったんだけど、あんましそんな気分になれなくて、結局、自然史博物館がよかったというのだけがはつきりと記憶に残っている。子どものころから図鑑で眺めていた始祖鳥の化石が見られたからね。その話をし出すと、どんどんずれていっちゃうからやめて

おくけど。下手をして、あのころがいちばんよかったとか、年寄りみたいなことを言い出したりしたらこっぴड़ाずかしいもんな。

㊦ 故郷に帰りますと、鹿である私の本性が頭をもたげずにはおかず、「私は。パ
ン屑を食べるつもりだ」と歌ったジョン・クレアと共通するような思いを抱きも
しました。

普通は、一度官職に就いたならば、服喪のために故郷に帰る以外は公職からは
離れないもので、私の伯父がまさにそうで、任地で病を得て亡くなったのでした。
皇帝ないし国家に尽くそうとの志を持って科挙に挑んだわけですし、たとえその
あたりの志が緩んだとしても、社会的、経済的に恵まれた官職を擲つというのは
考え難いことでありました。陶淵明に共感する人は大勢いても、実行するに至る

人は稀でありました。

私は少年時代に歩きまわった山々に足を踏み入れ、かつての道をあれこれたどり、自分の本当の思いを確かめようと思いました。何度もお話ししましたように、科挙を受ける決心は、スーパースターへの憧れもあって、自分でしたわけですけれど、父のためにといい思いがあったことは否定できません。父が己の志をほぼ果たし得て亡くなり、父のためにといいことからひとまず解放されたときに、果たしては自分はどうあるべきかというのを、改めて考えておく必要があったのです。

山に入るときには、よく馬正卿を連れまわりました。馬正卿には墓所の整備でさせ、そのことを通じて眉山の大勢の人々と交わり、土地の言葉や仕来りにも慣れ、我が家のことだけでなく、人の仕事の手伝いもして、なんだかんだと忙しくしていました。馬正卿が暇でないときは、私は一人で比較的近場を歩き、馬正卿がいる

ときには山の奥にまで入って行きました。

そんなある日のこと、昼間の長さを十分に活かそうと、朝のまだ薄暗いうちに家を発ち、それまでで一番奥深いところを目指しました。

道々、故郷に伝わるある昔話を馬正卿に語り聞かせました。それがその日の目的地に関係したからです。

眉州眉山県にほど近い通義県に楊正見ようせいけんという女性がいました。幼いころから心根がやさしくて賢く、清らかな生き方にあこがれていました。

年頃になると、親の決めた相手に嫁ぐということになり、近隣の王君おうと結婚しました。王君の家はなかなかの物持ちで、両親は、たくさんの客を呼んでわあわあにぎやかにするのを好み、ある日のこと、今日もまた親類を招いて酒宴を開こう

と、舅は市場に行つて立派な魚を買い込み、姑はそれをさばいて料理しよう楊正見に命じました。

舅も姑も客と一緒にたつて博打に興じ、そのうち昼時を過ぎて、人々は空腹を覚え、姑は厨に人をやり、食事の支度はどうなつてゐるのかと尋ねました。

「いますぐにお持ちします」

という楊正見の返事でしたが、それからしばらくしても食事は出て来ません。また人をやると同じ返事で、それでも、やはり食事は一向に出て来ません。とうとう業を煮やし、

「遅いぞ、遅いぞ。いったい何をしておるんだ」

舅と姑は怒鳴りながら足音高く厨へと向かいました。

楊正見は、盆に張られた水の中で魚が泳ぐのに見とれていて、全く料理をしてい

ませんでした。舅と姑がどやどやと近づいて来る気配に、にわかに恐ろしくなり、魚を抱えて厨から飛び出しました。そのまま門からも走り出て、一目散に駆け、いつの間にやら数十里も来てしまったのでしょうか、美しい花を咲かせた木々が道の左右にずっと立ち並ぶところに来ました。これまで見たことのない道で、そのままどんどん進みますと、山のほとりにぽつんと立つ小さな家に行き当たりました。

家の前に小ざっぱりとしたなりの一人の女性がいて、楊正見を呼び止め、

「そのお魚はどうしたのですか」

楊正見はありのままを話し、

「とんでもないことをしてしまいました。これではもう家には帰れません」と、泣き崩れました。

女性はじっと楊正見の様子を見て、

「これは教えがいがありそうだ」

と、一人うなずき、楊正見を遠く離れた泉に連れて行き、そこに魚を放させると、

「今日からここに毎日水を汲みに来る仕事をするのなら、そなたを私のところに置いてやろう」

楊正見は言われた通りにしました。

その女性は不思議なことに、一切ものを食べることをしませんでした。ただ楊正見のために時々どこかに行って食べ物を持って来てくれました。

こうして楊正見は恭しくその女性に仕えて怠ることがなく、数年が経ったある日のこと、いつものように泉に行きますと、そこにこれまで見たことのない子供がいました。ようやく歩き始めたばかりといった様子で、あたりにはほかに誰もお

らず、一人で遊んでいるのでした。その子がとてもかわいらしく笑うのを見て、楊正見は思わず抱き寄せ、しばらくあやしていました。ふっと姿が見えなくなり、あやしく思いはしましたけれど、いつものように水を汲んで帰りました。翌日、泉に行くときまたその子がいました。同じようにしばらく遊んで帰り、そのようなことが何日も続くうちに、

「そなたはこのごろは帰るのがやけに遅くなったようだが、どうかしたのかい」
問われて、何も隠さずに告げますと、

「そんなにかわいらしい子なら、私もぜひ見たいので、抱いたままここに連れて来なさい」

ところが、次の日からは子供が見えなくなり、いぶかしく思っていますと、一カ月以上経って、再び子供が現れました。楊正見は、いきなりその子を抱くと、一

目散に走って帰りました。ようやく家が見えて来たところで、はっと気づくと子供はぐったりとしていました。よほど強く抱きしめていたせいなのでしょうが、すでに息が絶えていました。

動転して家に駆け込み、何が何だかわからないままに女性に見せると、抱いていたのは木の根のようなものでした。

「思った通り、茯苓ぶくりようだった」

女性は、甑かしこでそれを蒸すよう楊正見に命じました。

その日はちょうど食糧が尽きるときに当たっていたために、女性は出掛けることになり、三束の柴を楊正見に渡し、

「この柴が燃え尽きたら火は終わりにしてよい。しかし、甑の中を決して見てはいけない」

そう言いつけて出て行きました。

いつもなら一晩で帰って来るのですが、その夜に大嵐となり、あちこちで山が崩れて道がふさがれ、女性は帰って来ませんでした。

楊正見はその日は言いつけを守り、柴が燃え終わると甑はそのままにしています。た。

その翌日もまた女性は帰って来ませんでした。食べる物は全くなく、楊正見はひどく空腹になりました。甑からはとてもよい香りが漂い出て来ていて、何度ものぞきたくなりましたが、じっと辛抱しました。

その翌日も女性は帰って来ませんでした。楊正見は餓えに苦しめられ、とうとう我慢ができなくなり、見るだけならと自分に言って、蓋を開けてしまいました。とてもおいしそうな匂いが立ちのぼり、これだけたくさんあるのだから少しだけ

ならと、つまんで食べてみました。いままでにおいしいきでした。

楊正見は一口だけでこらえ、甑に蓋をしました。

翌日になるとまた我慢ができなくなり、また少し食べてしまいました。こうして数日ですっかり食べ尽くしてしまいました。

十日ほどして女性が帰って来ますと、家の中を見るなり、ひどくがっかりした様子で、楊正見を叱らずに、自分に言い聞かせるようにして、

「仙人になれるかなれないかはもとから定めがあるのだろう。大水で道が壊されなければと思うのは詮無いこと。それももとの定めだったのだろう。我が師匠は常に言っていた。『この山には人の形をした茯苓があるはずだ。これを得て食すれば必ず天に昇れるだろう』。茯苓を求めてここで二十年を過ごし、私はそなたを弟子にしたと思っていたが、真に仙人になるのはそなたの方だったのだ。それ

ももとからの定めであったのだろう。そなたが放った魚が茯苓となり、それをそなたが食べる、それを手助けするのが私の役目だったに違いない」

このときから楊正見の姿は日に日に神々しくなり、目から光を放ち、多くの仙人が空を飛行して楊正見のもとに集まり、神仙の道とともに語り合うようになりました。こうして一年余りで、楊正見は天へと昇って行ったのです。それは開元二十一年壬申十一月三日のことでありました。

——嵐のせいで筋書き通りにいかなかったんだね。こっちの嵐はかなりおさまってきたみたいだけど。

それで、鶴の恩返しとかだと、約束を破ったために悲劇的な結末になるんだけど、約束を守れなかったことで仙人になっちゃったっていうのがちよっとおもしろ

ろいかも。約束は守らなくていいというのが、この話の主題……ってことではないよね。

㊦ この話をして、馬正卿に、

「今日は、楊正見の泉だとされているところまで行こうと思っているのだ」

「蜀の地には昔から不思議が多いと聞いております。山に入って仙薬を探し求める人がいまも絶えません。そのようなところもあるのでございませうなあ」

「子供の頃に、この山で一人の道士に出会い、薬草の探し方や仙薬の作り方やらを教わり、楊正見の泉にも連れて行ってもらった。しかし、残念ながら茯苓は生えていなかった」

——えーと、その道士のことはたぶん前に聞いてるよね。お姉さんをその小屋に連れて行ったんだよね (第2回)。

㊦ その通りです。十数年ぶりにその道士の小屋を訪ねてから泉に行こうとしたのですが、山の道が変わってしまったのか、私の記憶が違ったのか、うまくたどり着くことができませんでした。

——さっき茯苓は松の根に寄生する薬草だって聞いたけど、それを食べると仙人になるっていうのはホントなの？

㊧ 普通の茯苓にはそのような効能はありません。子供の姿にもなるような特殊

な茯苓でなければ駄目なのです。

「道士の小屋が見つけれられないのは、かの者も望み通りに昇仙し、俗界には一切の痕跡を残さなかったためだろうか」

「もしやあの鳥がその仙人だったりしませんでしょうか。若旦那様が久しぶりにお越しになったのを、ほら、あそこから見ておられるのではありませんか。もしも若旦那様に素質がありそうなら、自分の後に付いて来るよう誘ってくれるかもわかりません。そうしたらどうなさいますか」

「そうだな、一篇の詩をそなたに残して、姿をくらすとするかな」

「私めは俗界に置き去りでございますか。仙界にお供させてはいただけないのですか」

「そうするのは、そなたの本来の望みに反していると思うからだ。私としては無

理には連れていけない。天下のために有益な仕事をしようというのがもとの望みであろう。当面は私の乗る馬の手綱を取り、私に事をさせようというのではなかったのかい（第6回）。だから、仙界に行くまでもなく、私がもう都には戻らないと言ったならば、そなたはもう私を見限るであろう。違つかい」

「やはり迷っていらっしやるのでございましょうか」

「都に戻る戻らないにかかわらず、そなたをいつまでも私のもとに留めておいていいのか、日頃から気にかかっているのだ」

「私めには若旦那様のもとでまだまだやるべきことがあると思っております」

「こうして山歩きを重ねると、私の生きる場はもとよりここにしかないとも思えて来る。私に元来備わっているものは私に何をさせようとしているのだろうか。野山から出なかった先祖と同じように生きたいとの思いが強く湧いて来る。私が

都に戻らなければ、そなたは私を見限り、改めて科挙を受けるなどして、天下のために立派な仕事をするであろう。それがいいようにも思う。さらに、ある1人の女性を不幸にしないためにも、私は都に行かないのがいいと思ひもするのだ」

——ん？ 思わせぶりに一拍置いたけど、1人の女性ってなんのこと？ それがさっきのクイズで残っていたもう一つの悩みごとなの？ えーと、もしかして、故郷に帰って誰かと恋にでも落ちた？ そうなのがトバー君の本性だった？ 2人は深い仲になったけど、女性にはどうしても都には行けない事情があるとか？ それとも道ならぬ恋で、露見するともう官僚としてはやっていけないとか？ 週刊文春に知られるとヤバイとか？ いろいろおもしろい想像ができるんだけど。

㊦ 馬正卿はにやにやしなから、

「若旦那様にもしも思い思われるお方がおられましたら、蜀には司馬相如しばしょうじょの例もございますし、お父様がお亡くなりました上は、誰に遠慮することなく、御一緒になられたらよろしいではございませんか」

「司馬相如のように大金持ちの娘に見初められたわけでない。都に戻らずにこの地に留まれば、私は食うや食わずの貧乏暮らしとなる。私は必然的に女性を不幸にする。そなたが意地を張って私から離れまいとしても、どうしたって無理な話なのだ」

「貧乏暮らしは慣れております。私が働けば、若旦那様を養うくらいのことではできません。この地にも随分といろいろなつながりができましたから」

—あのですね、大金持ちの娘に見初めらとか、すっかり話が見えなくなったんだけど。どういうこと？

㊦ 漢の武帝がていという人は聞いたことがありますか。

—いきなり飛ぶけど、それくらいは世界史を取ったんで、知ってんよ。漢の全盛期の皇帝だよ。

㊦ その武帝に才能を認められた文人に司馬相如がいました。司馬相如は、蜀の第一の大都会である成都せいとの金持ちの家に生まれ、たくさんのお金を国に納めると

官職に就けるといふ当時の制度によって、都に出て武帝より一代前の皇帝に仕えました。ところが、自分が思い描いていたのは異なる宮仕えに嫌気がさし、都を去って地方の有力な王族に仕えることにしました。しかし、いろいろとうまくいかなくなって、仕方なく故郷に帰ってみると、生家はすでに没落し、その日の食べ物にも困るようなありさまになってしまいました。困窮した司馬相如を見て、この人にかけてみようと思つたのが、大金持ちの娘の卓文君たくぶんくんでした。2人は相思相愛の仲になり、しかし、親に反対されて駆け落ちをしました。その後、卓文君の懸命の努力によって親に結婚を認めさせ、様々な面で司馬相如を支え、ついには武帝に認められるまでに至つたのでした。

古い中国において、自由恋愛によつてよい結果が得られた稀有な例として、この2人のことは後世に語り継がれたのですが、正しい道徳律に照らせば2人の行

為は決して褒められたものではないというのが普通の評価でありました。

——頭のかたいおっさんたちがうるさいこといってたんだろね。自分は昔からの決まりを守ってきたんだから、人にも同じようにさせるみたいなことだよ。そういうのっていっぱいあるよね。過労死なんかもそういうとつからきてんだよなあ。おれたちはバリバリ働いてきたんだから、若い連中もそうするのが当たり前だつてことでさ。

それで、トバー君は、どういう女性とどういうことになったの？

㊦ 馬正卿との話を続けますと、あちこち歩いてたまたま見つけたやや趣のある水場を、とりあえず楊正見の泉に見立て、地に酒を注ぎ、楊正見とかの道士に捧

げました。もちろん茯苓は生えていませんでした。

馬正卿は持参した弁当を取り出し、

「このようなところで、すきつ腹で食べれば、麦粉を固めて焼いただけのこんな物でも、その味わいは茯苓にも勝るものがありますでしょうか。仙人にはなれずとも、何年か寿命が延びましょう」

「故郷の自然の中で故郷の物を食べる、それが何よりの仙薬であろう。鳳翔ほうしょうでも都でも私はしばしば心身の不調に悩まされた。眉山に帰ってからはそういうことは一度もない。ますますわが身の壮健を覚えるばかりだ」

「まことに結構でございますなあ。蜀の山々が仙界に近いからでありましょう。思えば、人は誰しもが世を逃れて昇仙したいとの願いを抱くものなのだろう。人の世はいつでも生きづらさに満ちているからな。しかし、世を逃れるのは難し

く、まして昇仙したいとの願いが叶えられることはまずない。男であれば、相應の決心をすれば、山に隠れることも不可能ではない。今も昔もそのような者はいる。私もかつては思い描いた。いろいろと考えた末に、科擧を受けて官員になる道を選んだ。男であれば、迷っても、最後は自分で決められよう。しかし、どうなのだろう、女性はそうはいくまい。どれほどの決心しても、女性が山に隠れるというのは古来極めて稀だ。そもそも女性はそのような思いを抱かないように育てられる。何事も自分で決めるのではなく、親に従い、夫に従い、子に従うようにと教えられる。それ以外の考えを持つことは許されない。楊正見にしても、清浄な生き方へのあこがれがありながら、山に隠れるということには思い至らなかった。たまたま食事の支度が遅れ、叱られるのが怖くて衝動的に逃げたのだった」

「楊正見の師匠はどうだったのでしょうか。仙人になろうと山に籠ったのはどの

ような理由からだだったのでしょいか」

「遺憾ながら、そのあたりのことは語られていない。気の毒にも仙人になりそこねた後でどうなったのかもわからない。女性は自分の望みがどこにあるのかを考へることさえないように成長させられる。だから、自覚的に山に入ったであろう楊正見の師匠は昇仙できないという結末になったのか。苦過ぎる教訓だ。そのように思うと、胸が押しつぶされそうになるのは、我が姉のことだ。私は、姉をかゝの道士の小屋に連れた。姉は楊正見と異なり、はっきりと世を逃れたいとの望みを抱いていた。姉がもしも道士のもとに留まりたいと言ったなら、何としてでも手伝う気でいた。その後で何が起ころのか、想像することもできなかったが、姉のためなら何でも引き受ける気でいた」

「さすが若旦那様、いい心意気でございますな」

「しかし、どこまで本気であったのか実のところは疑わしい。姉が家に帰ると言ったとき、正直、ほっとした。ひどいものだ。姉を家に連れ帰り、そして姉は嫁ぎ、死んだ。父は姉の嫁ぎ先を憎んだが、姉を死に至らしめたのは、この私だったのではないだろうか。私が姉に『山に留まろう』と言ったら、まるで違っていたであろうから」

「お姉様は、やはり嫁に行くべきだと御自分で決心したのでございましょう。若旦那様が科挙を受けると決意したのと同様に、子としてお父様のお心に副うべきだとの思案が働いたのでございましょう」

「二つの決心は似ているようでまるで違う。科挙を受け、官員になれば、未来の可能性は大きく広がる。嫁に行けば、極めて限定された可能性しかない。事実としては、程の家に行った姉は、己を縮めて縮めて縮め抜かなければならなかった。」

姉は仙人になって天をも飛翔し得たであろうに、その翼を広げようとする前に私が折ってしまったのだ」

「そこまで御自分をお責めにならなくてもよろしいように思いますが」

「いくら責めても足りない。さらに思うのは、我が妻にも大きな責めを負っている。妻は、もしも何かのきっかけで山に向かって走り出していたならば、楊正見のようになれたのではないだろうか。仙界において楊正見と並んで談笑し合うのがふさわしい女性でありながら、私が若くして死なせてしまったのだ」

「若奥様は若旦那様のもとで十分にお幸せであったのではないでしょう。もしも他の方と御結婚されていたらどうだったのでしょうか。若旦那様のように奥様の助言に素直に耳を傾ける男はそうはいません。それこそ身を縮めなければなりませんでしたでしょう」

「他のよろしくない例と比べて自分はまだまだましだというのは意味がない。自分が本当に正しいか、そうでないかだけが問題だ。だから、姉こと、妻のことをよくよく考え、今度こそは正しいことしなければならぬと思っている」

「再婚の話がやはり出てまいったのでございますな」

「なんだ、卓文君を持ち出しながら、そなたは実は知っておったのかい。まだ私あにうえと義兄上あにうえの間だけのことと思っておったが」

「全くのあて推量であります、義兄上様が鳳翔にお越しになったときに、そうなることもあろうかと思っておりましたので」

「あのとぎすでに……そうだったのか。もしかして、妻から何か聞いたのかい」

「いえ、いえ、何もおっしゃっておられませんでした。それでも自ずとわかるものぢやござます」

「どうやら私は全てに鈍感でありすぎたようだ」

——また話が見えなくなっただけだ。えーと、再婚の話が持ち上がったんだよね。奥さんの葬儀も終わったんで、そういうことがあっていいんだろうけど、それと、お義兄さんにいが鳳翔ほうしょうにきたってことが関係するんだよね。そんなことがあったっけ？

㊦ 鳳翔での任期が切れる直前に、妻の兄の王道矩おうどうくが訪ねて来ました(📖) 第9回。

王道矩は、前回、猪竜の話が私にしたのを笑った王愿おうげんの弟です。2人は兄弟でありながら、兄の方は生真面目で、あやしげな話やたわいもない噂話が大嫌い、弟の方は逆に珍談、奇談の類は聞くのも読むのも話すのも大好きでありました。

猪母仏にまつわる伝説ももとはといえば王道矩から聞いたものですし、楊正見の話も王道矩から借りた本に書いてありました。

——ああ、思い出したよ。お義兄さんがきたのは、奥さんが呼んだからだよね。そのわけは後で話すと、伏線を張ってくれたわけだけど、ちよつと忘れてた。でも、もうわかったよ。奥さんはそのときすでに自分が長く生きられないだろうとわかっていて、トバー君の再婚のことをお義兄さんに頼んだんだよね。そうだよね。

㊦ 古い中国では、妻が亡くなると、その妹や、妻と同じ一族の年少の女性と再婚するということがしばしばありました。家同士の結び付きを大事にするという

ことでもありましたし、同じ一族なら気心も通じやすいということでもありませんた。

妻は義兄上あにうえに自分の病氣のことを話し、従妹の王閏之おうじゆんしを指名し、このように言つて、自分の亡き後のことを頼んだのでした。

「あのお方のおそばにいて務まるのはあの子の他にいないと思います。私より賢く、私より穏やかで、私より慎ましやかで、私より忍耐強く、そして何よりも私よりもずっとあのお方をお慕いいたしましょう。私にはそれがわかるのです。でも、あの子がもしも嫌だと言ったなら、それはそれで仕方ありません。でも、そういうことはないと思います」

王閏之は妻より10歳年少の従妹で、妻が王閏之と最後に話したのは王閏之が11歳のときだったろうと推測されますが、そのときに感じるものがあつたの

でしょう。

妹に頼まれた義兄上は、私が帰郷する前に、王閨之の父の王介おうかいに話をし、王介が王閨之の気持ちを確かめると、我が妻が望んだ通りにしたいという返事であったようで、葬儀の頃には、後は私次第というところまで話ができあがっていました。そして、服喪期間の終わる前の春に、義兄上からこうした経緯を聞かされたのでした。もしもこれが妻に始まったことでなかったら即座にお断りしたでしょうけれど、返事はしばらく待つてほしいと義兄上に答えました。

——よくはわかんないけど、向こうの王さんの家にしたら、とっても難しい試験にも合格したトバー君となら、願ってもないいい縁談なんだろうね。トバー君が保留にしたのは、奥さんのことだけを思って、これからは一生独身を貫こう

つてことだったりした？

㊦ 馬正卿にはこのように説明しました。

「姉が果たせなかった思いをこの私かと、自分は山からもう出ないとここで決めたなら、妻を娶ることはあり得ない。山ではなくても、眉山の地に留まるのなら、やはり妻を娶ることはあり得ない。農民としても、あるいは商人としても、妻や子を養って行けるだけの才覚が私にあるとは思えない。唯一暮らしを成り立たせることが可能なのは官職に復帰することだ。しかし、鳳翔でも都でもしばしば身の不調に悩まされた。本性が鹿である私には、本来的に官職には馴染めないのだろう。鳳翔でかろうじて任期を全うできたのは妻がいてくれたからだ。そのことはそなたがよく知っている。妻は私を支えるためにその寿命を縮めてしまった。

私はそう思っている。この先、都に行けば、我が本性からの乖離は一段と激しくなるのは必定だ。聞けば、王閏之はより穏やかで慎ましやかであるという。そのような女性に妻以上の労苦を強いるわけにはいかない。いずれにしても妻を娶ることはあり得ない。そうは思わないかい」

——ボクがトバー君を説得する側の人間だったら、こんなふうにかも。断れば、2人の女性の思いを踏みにじることになるのではないかって。奥さんとその気になっている王閏之さんの2人だけだね。自分のことばかりかかってちゃだめだっただよ。

① 馬正卿も同じでした。

「若奥様以上に若旦那様のことをよく御存じのお方はありませんでした。大旦那様もかつて大奥様のお導きの通りになさったではありませんか。迷う必要は一切ないではありませんか」

それには私はうなづく以外にありませんでした。しかし、だからといって決めることはできませんでした。再婚は都に戻るか否かと連動していて、どちらか一方だけを決めるわけにはいかなかったのです。

——そうなの？ 都にはもどらないけど、再婚はするっていう選択だってあるんじゃないのかなあ。食べていけないみたいないことを言ってだけど、それこそ、木を植えるのが得意なんだから、山の仕事をして暮らしたっていいじゃん。

㊦ 山の中で馬正卿といろいろ話しましたけれど、そこで結論は出ませんでした。

——じゃあ、弟さんと相談して、決めたのかな？

㊦ この後で、弟と成都せいとに行きました。

かつて鳳翔で、呉道玄ごどうげんが描いた4枚の菩薩像を得て、それを父の供養のためにお寺に寄進したということをお話しました㊦ **第9回**。寄進した寺は成都にあり、惟簡いかんという僧の骨折りで、寄付を募って菩薩像を納めるための堂を建ててくれることになり、その起工式の法要に弟と立ち会いました。

ある夕べのこと、弟と成都第一の歓楽街へと足を向けました。喪に服している間にそのようなところに行ってはならないのですが、むしろそうした禁に触れる

ことで、自分の気持ちを確認したいとの思いがありました。

——どういうこと？ また週刊文春かな？ いかがわしい場所でいけないことをしている現場写真を撮られて、世間を騒がせて申し訳ありませんと謝って、政界への復帰を断念するという筋書きかな。

そうではなくても、胸に悩ましいものがあつたりするときには、ちよつとばっかはめをはずすというの必要だつたりするのもね。

㊦ 弟には私の気持ちがあつていたのでしよう。止めようとすることなく、黙って付いて来ました。

煌々と灯のともる歓楽街に足を踏み入れると、たちまち人々の猥雑な喧騒に包

まれました。都にいたときには、賑やかな盛り場を通りかかることがあつても、浮かれるような気分になつたことは一度もありませんでした。むしろ疎ましく感じ、早くそこから離れたいと思つたものでした。ところが、そのときは、妙に気持ちちが和らぎ、しみじみと懐かしいような感じさせました。

「どうも不思議なものだ。かつてここに親しんだということはないのに、この町の無数の灯、明かりに照らされるすれ違ふ人々の顔、あちこちから聞こえて来る声、店の奥より響く管弦の音、どれもこれも昔から馴染んであつたかのように感じられる。それはどうしてなのだろうか」

振り返つてこのように言うと、弟はじつと私を見て、

「ここは遊興の場。歓楽と哀愁の場でありましょう。ここにはしみじみと深く情に触れるものがあるのではないでしょうか。このようなところにこそ人のまこと

「があると感じ、兄上は恐らくは、『沂きに浴よくし、舞雩ぶうに風かせして、詠じて帰らん』のお心持ちでおられるではありませんでしょうか」

「これほどまでに卑俗な場で、『論語ろんご』を持ち出しては、孔子様に叱られるのではないのかい」

「俗にあつてこそ聖ということもありましょう」

「どうやら、ここで、『論語』の解説が必要になりますね。」

——『論語』かあ。『論語』と聞いただけで、自動的に睡魔のスイッチが入るような感じがするけど、話の流れで必要なら、かるくかたずけてくれちゃつていいよ。

㊦

あるとき、孔子は弟子達に将来の希望を尋ねました。各自が先を争うようにしてそれぞれに思うところを語るなかで、曾皙そうせきという人は孔子に促されても、

「他の人とはまるで違っておりませぬので」

と、なかなか言おうとしませんでした。そしてようやく語ったのが次のようなことでした。

「春の終わりに、新しく仕立て終わったばかりの衣を着て、若い人々とともに出かけ、川のあたりで行水をし、小高い丘で風に吹かれ、ぶらぶらと詩を吟じながら帰って来る、そのようなことができたらと思っております」

孔子はそれを聞くと、深く嘆息し、

「私もその仲間になりたいものだ」と言いました。

国をどのようにして動かすのかといった大きな望みより、ごく身近なささやかなところに深い喜びを見出すような感性を、このときの孔子は称えたのでした。

弟は言いました。

「ここで庶民の哀歓をしみじみ感じ取るのは、曾皙が風に吹かれて詩を吟じる心持ちと通じるものがないとは言えませんでしょう。なおかつ、ここは成都です。

人々が話すのは我が蜀の言葉、人々が奏でるのは我が蜀の曲です。懐かしく感じられて当然でありましょう」

「私はいま、普通には卑しいとされるような仕事に就いてここで生きてみたいとさえ思うようになっていた。山の奥に籠るよりも、あるいはここは仙界に近いのではないだろうか。ほら、向こうの方から、竹を撃つ音が聞こえて来ているではないか。あれは何かの芸を披露して銭を稼ごうという者であろう。私も彼の者に

見習い、即興の詩や詞を聞かせて、町を流して歩く人間になってみたいものだ」
音に誘われて行くと、街角に人だかりができていました。人々の頭越しに中をのぞくと、2本の竹をくるくる回しながら撃ち合せて、小気味よい拍子を刻み、それに合わせて滑稽な仕草で歌っている男がいました。

「あれはまさに聞くところの撃竹子げきちくしの類であろうか」

撃竹子と言いましたのは、義兄の王道矩から借りた本に記されていた大道芸人で、たびたび話が中断しますけれど、そのことを先に申しておきましょう。

——さっきの『論語』も眠らずにすんだんで、好きな順序で話してくれていいから。

① これも唐の時代のことだったのでしょうか。

撃竹子はその姓名も生まれもわからない。年は三十余り、成都の盛り場で、二本の竹を手にし、パッチン、パッチン、撃ち合わせて拍子を取り、歌って人から銭を得ていた。その詞は世の中の道理をよく穿つもので、撃竹子はなかなかの人気者だった。銭を得ると酒を飲み、酒を飲み終わるとどこかに消えてしまうのだった。

十年余り撃竹子はそのように盛り場で歌っていたのだが、ある日のこと、東の市の葉屋の黄こうさんの店にふらりとやって来ると、

「あなた様は曲がったことが大嫌いで、いつも正しいことをすると聞いております。それでぜひともあなた様にお頼みしたいことがあります。初めて参っていきなりではありませんが、思うところを申し上げてもよろしゅうございませうか」

黄さんも撃竹子のことは知っていたから、

「思うことがあるのなら言ってみるがいい。できることであればいたしましょう」

「あっしは物乞いをして暮らし、ここから北の門を真っ直ぐ外に出た七里亭の橋の下を仮の宿りとしております。ここのところ病を患い、もはや助かるまいと思っております。あっしが死にましたら、死骸を焼いていただきたいのでございませう。このようなきのため貯めた銭がここにあります。これで柴を買って、焼いていたきたいのです。その上で特にお頼みますのは、あっしの心臓にはどうか触れないでいただきたいのでございます。もしも叶えていただけましたら、きつとその御恩に報いたいと思っております」

撃竹子が銭を差し出したのを見て、

「なんだ、それしきのことなら、銭などいただかなくてもいたしますよ」

黄さんは受け取るうとはしなかったが、撃竹子は銭を放り投げるようにして置いて行った。

翌日、黄さんは様子を見に橋の下に行くと、果して撃竹子は葭の上にかにも具合が悪そうに伏せていた。

「よく来て下さいました。いよいよ病は悪くなるばかりです。これがお頼みしたことのお礼でございます」

伏せたまま枕の下から出して来ましたのは黄金の塊で、このような乞食芸人が持っているようなものではないので、黄さんは驚き、

「頼まれたのはごく簡単なこと。こんなものをいただくわけにはいかない」

「昨日申し上げました通り、決してあっしの心臓には触れないでいただきたいのです。特にそのことをお頼みします。これはそのためのものです」

そのようなことを言い合ううちに、撃竹子はふっと息を引き取ってしまった。

あまりにあっけない最後に黄さんは驚いたが、約束通りに渡された銭の分だけ柴を買い、野に積んで、その上に撃竹子の亡骸を置いて、火をつけた。火がまわると、とてもいい香りがあたりに満ち溢れ、鳥が集まって来て、あたかもかつて撃竹子が歌っていたように囀った。

亡骸は見る見る消え、なお燃え盛る火の中に、ただ赤い心臓だけが残った。それは普通の心臓の何倍もの大きさがあり、つやつやとして、どくどくと脈打っていた。黄さんは気味悪く感じながらも、火を守り、夕方に至って柴はほぼ灰となり、心臓だけがそのまま残った。

日が陰り出し、そろそろ帰らないと門が閉まって成都の町に入れなくなってしまう時刻になった。黄さんは考えた。心臓に触れてはいけないと言われたけれど、こ

のまま野に放置して行ってしまったら、野犬にでも食べられてしまうだろう。地に埋めるにして、町に持ち帰るにしても、心臓に全く触れないわけには行かない。いろいろ考えたあげく、時間に迫られ、袋に入れて持ち帰ると決め、まだ熱い灰の中から取り出すために、木の枝を恐る恐る近づけた。先端が触れるか触れないかの瞬間に、雷のような大きな音がし、心臓は大爆発を起こした。

衝撃で黄さんはあお向けにひっくり返った。その上に、煙が真っ直ぐ天へと立ち昇り、その中に大きな男の姿が現れ出た。それは撃竹子だった。

撃竹子はいつものように竹の音を響かせ、そのままゆっくりと天へと昇って行った。

黄さんはひれ伏し、約束を破ったことを詫びた。撃竹子は笑みを浮かべ、「あなたのお蔭で宿願が叶いました。ありがとうございます」

撃竹子はみごとに仙人になったのだった。

このことを聞いた人々は、

「あれはきつと心臓に触れなかったら昇仙できなかったのだろう。触れさせるために、わざと触れるなど言ったのだろうか」

と言い合った。

仙人が昇天するとは、かくも不可思議なことで、成都には撃竹子のような者は昔から少なくなき、人に銭を乞うような者であっても決して軽んじではならないのである。

——へーえ、さっきの話と共通するところがあるよね。約束を破るということが仙人になる過程で必要だということに、何か深い意味が潜んでいるのかなあ。

㊦ そのあたりのことは私にはわかりませんが、街角で歌う男が撃竹子の末裔ではなからうかと思うと、ゆかしい気持ちが強まり、群衆の中に混じってしばらくその歌を聞いていますと、男はちらりとこちらに視線を送って来まして、竹を撃つ調子を変え、いままでもより軽やかに声をころがすようにしてこのように歌い始めました。

へ米価 騰貴の こんにちに、

細民 困窮 みかえらず、

科挙も 制科も なんのその、

衣冠 束帯 厳めしく、

権門 貴顕に 腰を曲げ、

詩文 絵画に うつつを抜かし、

外には 名声 赫々も、

同胞 兄弟 見殺しか、

いくら孔孟 唱えても、

あまり非道な 薄情な、

冥土に落ちても はんちゆうえん 范仲淹

顔パス効いて 大手で極楽、

行けるかえ、行けないよ。

オッペケペ。オッペケペッポー ペッポーポー。

オッペケペ。オッペケペッポー ペッポーポー。

——やめてよお。なんでそんなに大きな声で歌うの？ もう外の嵐は終わったみたいで、声が道にまで響いちやつて、一緒にいて恥ずかしいよ。

でも、それってさあ、あれだよね、明治の「オツペケペー節」だよね。ボクだからだまされなかったけど、ふつうの人なら成都にそんな歌があつたのかなあつて思つちやうよ。この町となんだかの縁がある川上音次郎かわかみおとじろうっていう人が「オツペケペー節」を歌っていたっていうのを、なんとなく知っていたからわかったけどさ。ほら、いまYouTubeで検索したら、出てきたよ。もとの歌はこれだよね。

へ米価 騰貴の こんにちに、

細民 困窮 みかえらず、

目深かに おうた高帽子、

金の指輪に 金時計

……

歌詞が少しだけ違うけど、まるつきり「オツペケペー節」じゃん。まったく、これだから、トバー君の話はおちおち安心して聞いていられないんだよなあ。

㊦ 男の歌を聞いて弟は、

「いまのは私達のことを歌ったのでしょいか」

「だろうな。僕はともかく、君は頭一つ抜け出ているから、あの撃竹子君からま
る見えだろう。制科まで受かったと詞に入れ込んで、あからさまに僕等を揶揄し

てみせたのだ」

「けしからんと、あの男に抗議しますか。『外には名声赫々も、同胞兄弟見殺しか』とは、あまりの言い草ではありませんか。いま私達は喪に服しているまでで、民衆の困窮に知らん顔をして遊んでいるわけではありません。それに、ここはこれほどまでに賑わい、あの男もやんやの喝采を受けて多くの銭を受けているのですから、さほど困窮しているとは言えますまい」

「この賑わいにも陰が潜んでいよう。今のままこれからも続く保証はどこにもない。銭が投げられているのは、民衆にゆとりがあるのではなく、いまの歌に共感するからではなからうか」

「我等が極楽には行けまいとからかわれているのを、人々は喜んで聞いているのでしうか」

「君は行けるとしても、この僕は駄目だろうな。范仲淹殿に顔パスが効くはずはなく、むしろ逆に、范仲淹殿は僕を見たらすぐに地獄行きの指定席券を渡すことだろう」

「兄上は都には行かないのですか。『同胞兄弟見殺し』のそしりもやむなしと思つておられるのですか」

「そう決めたわけではない。喪が明ければ直ちに都に行くべきであるのに、そういうことにいまはまだなっていないだけだ」

「お心が定まらないのは、山に引かれるからですか。それに加えて再婚のお話もあるからでしょうか。あちらの女性を不幸にしたくないということなのでしょうか」

「君には何も隠せない。その通りだ。それともう一つある。父上のあの遺稿だ。」

あれは私への戒めなのではないだろうか。それを守って行ける自信が私にはない」
「父上はそういうことでお書きになったのではないと思います。父上は今日あることを予見していたのではないでしょう。父上の警告が現実のものにならないよう、兄上は都に行くべきなのではないでしょうか」

——えーと、またしても話が見えなくなってきたんだけど、お父さんの遺稿って、なんのこと？ 前に聞いてたっけ？ えーと、思い出すと、お父さんの思いはトバー君の名前の「軾」しやくの字にこめられているってことは聞いたよね  第10回。外側をきちんさせることも大事で、思ったそのままを言ったり、行ったりしないようにという注意だったと思うけど。

㊦ それともう一つ、山濤さんとうをして「天下の人民を誤らせるのはきつとあのような

者であろう」と言わしめた王衍おうえんのようになってはならないと、父に注意されたこ

ともお話したと思います（ 第11回）。王衍は大変な才人で、人の気持ちを掴む

のが巧みで、国の将来を担う人物であると囑望されました。しかし、結局のどこ

ろは国を滅ぼしてしまいました。山濤は早くに王衍が危険な人間であると見抜き、

父は私には王衍に似たところがあるのではないかと心配していました。

さて、帰郷してから、父が書き残したものを整理したところ、いままで読んだ

ことのない原稿がいくつも見つかり、そのうちの一つに次のようものがありました

た。

物事が動けば必ず行き着くところがあり、物事の背景にはそれが始まる前から定

まっっている何らかの原理がある。

人々は、月に暈かさがかかれば風が吹き、敷石が湿り気を帯びれば雨が降るといふことなら知っている。しかしながら、それよりも前のごくわずかな徴候の段階において、原理と行き着くところを知るのは、天下の最も冷徹な者だけである。

人間界の物事の推移には、原理と時の勢いとは複雑に絡み合い、その関係が見えにくく、変化を予測するのが難しい。恐らく宇宙の変転を予測するよりも難しいだろう。しかも、いかに賢者であっても、好悪の情が心を乱し、利害の有無が判断を左右してしまうことがあるのだから、なおさらである。

昔、山濤さんとうはまだ少年だった王衍おうえんを見てこう言った。

「天下の人々を誤らせるのはきつとこの者だろう」

昔、郭子儀かくしぎは盧杞ろきを初めて見たときにかこう言った。

「この者が思うように振る舞うようになったら、我が子孫は一人も生きられないだろう」

この二つの事例を挙げると、山濤と郭子儀はこれこれこのような訳で言ったのであって、さすが二人は大した眼力の持ち主であったと、人々はすぐに言うだろう。実際に王衍が国を滅ぼし、盧杞が国を乱した結果を知っているからだ。

私はそうした人々とは少々別のことをいま考えている。王衍の人となりを見ると、容貌も言動ももとより、世間を欺き虚名を盗もうとするに足るところがあった。

それでも、敢えて貪り、敢えて害を為そうとするような者ではなかった。世間と同調するのが単に巧みだっただけなのだ。当時の皇帝がもしも英明であったなら、王衍のような輩がたとえ百人、千人いたところで、国を滅ぼすには至らなかつたはずだ。盧杞は国家を混乱させるに十分なねじくれ者ではあつたけれど、学問が

なくてろくに文章が書けず、容貌も弁も人を引きつけて感心させるようところもなかった。当時の皇帝があそこまで愚かでなかったならば、盧杞などを用いることにははなからなかったはずだ。だから、私の考えでは、王衍や盧杞を批評したくらいでは、山濤も郭子儀も大したものだということにはならないのである。

いまもしもこのような者がいたらどうだろうか。それは、口に孔子や老子の言葉を唱え、身は古の賢人と同じ振る舞いをし、名声を好む人、志を得ない人を集め、ともに言論を構成し、自分達で評価基準を立て、古の聖人の再来だと言い募り、しかし、陰険で根性曲りであることにかけては人から抜きん出ているというような者だ。要するに、王衍と盧杞を合せて一人にしたような人物である。そのような者がいたなら、そのもたらす禍は一体どうなのだろうか。

顔に垢が付けば洗い、衣に垢が付けば濯ぐのは人として当たり前前の情である。と

ところがそうはしないで、卑しい僕しもべの衣を着て、犬や豚の餌のような物を食べ、髪はぼさぼさ、顔は垢にまみれ、それでいて聖人の経典を談じるのは、人として普通の情であるのだろうか。人の情からかけ離れた者で、大姦人、大悪人ではなかった者は少ない。歴史にあまたの例を見ることができる。

世間を覆うばかりの名声を得て、まだ形としては現れていない害悪が萌しているということがいまあるのではないだろうか。国をよく治めようとする君主も、優れた人を好む大臣も、皆がこの者を用いようとしているときに、私だけは、天下の患いが起こるのは必然であると思うのだ。危険性は王衍や盧杞の比ではないのだ。

孫子そんしはこのように言っている。

「よく兵を用いる者は特に目立った功績はないものだ」。

いま私が指摘した人が用いられなければ、私が言ったことは過ちだったことになり、その人は己は不遇であると嘆くであろう。そして、禍が行き着くところに至ろうとしていたことなど誰も知らないままに終わる。もしもそのようにならなければ、天下は禍を被り、私はよく未来を知っていたと称賛されるであろう。それは悲しいことではないか。

——えーと、ちよつと難しい内容だったけど、いまの文章がトバー君への戒めだというの？ どうもよくわかんないなあ。トバー君が国を滅ぼすような大悪人になるってお父さんが書いたの？ そういうことで書いたようには思えなかったけど。服が汚れていても気にしないとか、犬の餌のようなものでも平気で食べるとか、トバー君に当てはまるようなところがないわけではないけど、トバー

「君の本心は山に籠っていたいっていうほうなんだから、なんかかなり違うように思うんだけどなあ。」

① この遺稿が出てきたとき、父が何を意図して書いたのか、私も弟も量りかね、一応の解釈としては、仮にこのような者がいたらどうだろうかと思案を巡らし、文章を組み立ててみた、いわば練習課題のようなものではなからうかということになりました。だから、世間に対して警告するという体裁で書かれていながらも、誰かに見せることもなくしまわっていたのです。

私は、王衍を悪しき例として父に注意された経験がありましたから、父が余程王衍を嫌っていたということを改めて知り、自分へのさらなる戒めとして受け止めるべきではないかと密かに思いました。我が身を顧みれば王衍に似たところは

確かにあります。盧杞のような狡猾さを兼ね合わせたなら、父が言う最悪の人間にもなってしまうでしょう。自分が絶対にそうはならないとの確信がない限りは都には行つてはならないと私は思いました。

——それって、都に行くことに後ろ向きになっていたから、そんなふうにならなくて止めたつてことだったりしない？ 同じ歌を聴いても、多くの人は自分を励ましてくれていると感じても、ある人は逆に自分だけ疎外されていると思つたりするつてことあるよね。ボクがそうだったりするんだけど。

㊦ 弟も同じようなことを言い、その上で、

「父上は自分の予言が当たるのは悲しいとお書きになりましたが、その兆候がい

まや、月にかかる暈や敷石の湿り気のように、凡人にもわかるようになって来ているのではないのでしょうか。父上が実在の人物を念頭に置いてお書きになったのかどうかは不明ですが、まさしくそれに当てはまる人物が現れ出て来たのではないのでしょうか」

「君はもしかして王安石殿のことを言っているのかい」
おうあんせき

「そうです。垢の付いた衣を着て、食べる物に無頓着であるというのは、まさにその通りではありませんか」

「その点は僕も同じだ。王安石殿は王衍のように人から好かれる振る舞い方はない。むしろ、鋭い舌鋒で人から敬遠されるところがあるのではないだろうか。僕の方がずっと王衍に近い」

「王衍との表面的な類似ではなく、お上の目に特に好ましく映っているのかどう

かということが本質なのではないでしょうか」

「まさか君は、父上が指摘された愚かな皇帝といまのお上を比べようと言うのではあるまいな」

「父上がお書きになったその通りのがいま起こりつつあるとまでは言いません。しかし、『名声を好む人、志を得ない人を集め』るということがこの先にあるのではないのでしょうか。お上はかつての愚かな皇帝とは異なりましょう。しかし、まだまだお若いのです。王安石殿の抜擢はあまりにも異例であります。いささか危惧しないわけにはまいりません」

——えーと、王安石が宋の時代に大改革を行ったということは世界史の教科書にも太字で書いてあったから、ボクも一応はそのことくらいは知っているし、前に

も王安石について話してくれたことがあったんだけど（第4回）、でも、ここはちよつと説明してくれないとわかんないよ。

ⓧ 私が故郷に向かって長江を遡っていた間に先の皇帝が亡くなり、新たに神宗しんそう皇帝が即位されました。新皇帝は先々代から積み残しとなっていた国政の改革に取り組み強い意志を示し、重臣達に意見を聞きました。すると、即位してすぐに急な変化を求めるべきではないというのが大方の意見でありましたので、皇帝ははなはだ飽き足らず思い、かねてその名を聞いていた王安石を地方から呼び、直接意見を聞きました。その結果、皇帝は王安石とともに改革を進めようと考えたのですが、それに対して、重臣達は相次いで懸念を表明しました。しかし、皇帝は王安石を中央で用いることを決めたために、都にはかなりの動揺が広がって

るということが、弟と話していた時期に蜀の地にも聞こえて来ていました。

——王安石が昔の2人の悪人を合わせたような振る舞いをして、若い皇帝を操り、とんでもないことをしてしまったら、さっきのお父さんの文章が予言としてぴったり当たるとなるわけだね。

㊦ 振り返れば、国政の大改革が緊急の課題であると范仲淹が指摘したのは、私が郷里の寺子屋でスーパースターの名を聞いた8歳のときよりさらに昔にさかのぼります。范仲淹が改革のごく一部を手掛けただけで、結局のところは現状維持のまま20年余りの歳月を空費してしまいました。そのために社会の様々などころに歪が出て、その一例が、鳳翔で顕著になっていた自営農家の没落です。蜀の

地でも富の偏在が進行していました。私のように科挙に合格して官員となった者は持てる側に参入でき、いささか鈍感になれば社会の痛みを感じることなく、豊かな暮らしを無頓着に享受することも可能でした。

——だから、「同胞兄弟見殺し」と歌われたんだね。重臣たちが改革に後ろ向きだったのは、やっぱ「同胞兄弟見殺し」の連中だったからなのかな。

Ⓣ 早くに亡くなった范仲淹以外のスーパースターは重臣として朝廷に名を連ねていましたから、改革に後ろ向きであったわけではなく、過去の失敗に鑑みて、慎重であったのです。

問題は、王安石が皇帝に進言して行おうとしている改革が、果たして国ため、

民のためになるものかどうかということ。前回申し上げましたように、この場では、国政に関わるようなことより、個人的なところを中心にして『遊たびの奇絶』を語って行くようにしたいと思っておりますので、王安石の改革の是非をことさらに論じるようなことはしないでおきたいと思えます。

それはそうとして、私が故郷にいた時点では、王安石が何を意図しているのかまだ知れていませんでしたから、弟に向かつてこのように言いました。

「何ら根拠なく王衍や盧杞に対比させるのは慎むべきではないのかい。改革は必要で、このまま放置していいはずがないのだから、お上が強い意欲を示されていることに期待すべきではないのだろうか」

「改革が実行されればその影響は国の隅々にまで及びましょう。皇帝の御恩はあまねく全ての民に及び、逆に何か事があれば、あまねく全ての民が困ることにな

ります。事と次第ではこの盛り場の灯が消えてしまうことだって起こり得ましよう。国が乱れても、山に隠れば自分達の平穩な暮らしを守ることができた大昔とは全く異なります。国政の大改革がこれから行われようとしているときに、ここに留まって、期待すべきではないかななどと、単につぶやいているだけでよろしいのでしょうか。科挙にも制科にも合格していない者ならそれでも許されましよう。我等はそうはいかないのです。あの撃竹子はけしからんと、怒らずにいてはいけないのです」

「君の言うことはわかる。しかし、王衍ないし盧杞になるのは、王安石殿ではなくこの私であることを恐れるのだ。父上の戒めを守れる自信が私にはない」

「あの文章がもしも兄上への戒めだったとしたら、それこそ撃竹子がした約束と同じなのではないでしょうか。戒めは破られるものと、父上は見通されているの

ではありませんか」

「どういふことか」

「兄上は蜀の地を愛されています。この町の賑わいが続き、庶民の暮らしがいまよりもよくなって行くことを心から願っておられます。国政の改革は、国家のためになされるのと同時に、庶民のためになされるものでなければなりません。もしもお上のお心が誰かによつて乱され、正しくない改革が始まるような事態に至るようであるのならば、何としてでもそれを止め、正しいあるべき改革を行えるようにすべきです。そのためには、たとえ王衍や盧杞のようだと批判される振る舞いも辞すべきではないのでしょうか。父上は、王衍に盧杞を合わせたとような者が最も恐るべき大姦者であるとお書きになりました。逆に言えば、それは最強の大忠臣にもなれるということなのではないのでしょうか」

弟にまくしたてられて、いわば最初にあなたがおっしやっていた「平穩生活権」のために、都に行くとは私は決意するに至ったのです。

——弟さんって、やっぱ、かなりの直情家なんだね。それで、ゴタゴタしているところに飛び込んで行くのって、火中の栗を拾うっていうんだよね。そのことわざは、なんかおもしろものをちやつかり手にするような感じもあるんだけど、そういう意味じゃないんだよね。

㊦ 政争に乗じて皇帝の心を掴み、権勢を振うというような意図が少しでもあれば、それこそ父の戒めを完全に破ることになりましょう。おいしいものがあると期待して都に行くわけではないので、

「君と一緒に火中に飛び込もうというのだから、世の荒波をまだ何も知らない若い娘を連れて行くことなどはできない。再婚の話ははっきりとお断りしておこう」

「それはいけません。このようなきにこそ、兄上にはしつかりと支えて下さる女性が必要です。再婚は兄上のためだけではありません。相手の女性のためにもすべきです」

「どうして女性のためになるのだ。いまのような事態でなくても、都は様々な抗争の場だ。そこに連れれば苦労ばかりをさせる。不幸にするようなものだ」

「聞くところでは、お相手の女性は、亡くなったお義姉様ねえさまに選ばれたことを、この上なく光栄であると受け止めておられるとのこと。私の見るところ、兄上を支える女性としてお義姉様に勝るお方はこの世にはいないと思います。そのお義姉様がこの人であるとお考えになったのです。それをお断りになるのは、お義

姉様のお心も、そしていまのお相手の女性の心も、二つながら踏みにするようなものなのではないでしょうか」

「妻のことは置く。私が断れば、向こうの女性は一時的には失望するのかも知れない。しかし、まだ若いのだ、新たな良き伴侶が見つかって、幸福が得られだろう。そうは思わないかい」

「私も世の中のことを少しは知っています。兄上とお義姉様のような夫婦は稀です。私も兄上を見習いたいと思っても、とても及ぶものではありません。兄上はお相手の女性を不幸にするとおっしゃいますが、確かに苦労はなさるでしょう。それでも、他のあらゆる男のところへ嫁ぐ不幸に比べたら、ごくわずかなものでしかないとは断言します。兄上はあちらの女性のために、何としてでも結婚しなければならぬのです」

——へーえ、弟さんってなかなかすごいことをいうね。で、再婚すると決めたんだ。

㊦ 成都から眉山に帰り、7月に喪が明けますとすぐに、私達は都に行くための支度を始めました。再婚したのは8月で、相手の王閏之はそのとき21歳で、私は32歳でした。

——それで、結婚してみて、どうだった？ どういう女性だった？

㊦ 先の妻が言ったのは、「より賢く、より穏やかで、より慎ましやかで、より

忍耐強い」ということでしたが、より穏やかでより慎重しやかであったのはまさにその通りで、そのために、私が放縦になってしまうということが後にありました。そのあたりのことはまたいずれお話しすることにいたしましょう。

——奥さんがおとなしいのをいいことに、勝手なことをしたってことかな。得意の気をもたせ作戦だけど、まあ、いずれ聞かせてもらおうからね。

① 都に向けて眉山県を出発したのは10月でした。今度は長江を下るのではなく、陸路を選びました。科挙を受けるために父に連れられて初めて都に行つたときとはほぼ同じルートを取り、道々、都で何が進みつつあるかの情報を集め、心の準備をしたのですが、そのあたりのことは次回として、今夜の最後に、妻の実家

の王一族が住む青神県での別れを語っておきましょう。

送別の宴が催され、王の家の人々だけでなく、近隣の人々も多数集まって、盛大に見送って下さいました。中でも、王慶源^{おうけいげん}、蔡子華^{さいしか}、楊君素^{ようくんそ}の3人はあらかじめ荔子^{れいし}の苗木を用意し、日当たりがよく水はけのよい場所を選んで穴を掘り、私にそこに苗木を置いて土をかけるよう言いました。

「この木が大きくなり、ライチーがたわわに実る頃に、この4人がまたここに揃いつどって食べたいものですな」

3人の中で一番の年配の蔡子華がそのように言いました。

——テレビで見たりする天皇の植樹祭みたいだけど、ライチーの木を植えて、必ず再会しようという気持ちをかたちにしたってことだね。

㊦ 私は蔡子華と同じ蔡の姓の蔡沢さいたくという人の故事を思い起こし、

「これから先に私達にいかなることがあるのか、蔡沢のように占ってもらいましょうか。蔡沢は占いの先生に向かつて、『富貴は、運勢などに頼らず、自分で手にする。ただ寿命だけを教えてほしい』と言いました。寿命はこの先43年とのお告げに、『43年も贅沢をすれば十分過ぎる』と答えました。己の才能をもつてすればすぐに諸侯に重く用いられると、蔡沢は自信に満ちていましたが、その思惑ははずれ、あちこち巡り歩いて苦勞を重ね、ようやく宰相の地位を獲得したのも束の間、人の讒言によってわずか数カ月で降りなければなりません。蔡沢ほどの才能のない私には富貴は望むべくもなく、これから43年もの寿命があるとも思えません。ここに帰ってライチーの実を皆様方と食べるのは、そう遠い先

ではありませんでしょう。そして、私が本当に願うのは、同じ蔡姓の人でも、蔡経さいけいのように王先生に従って仙界に行く方であります」

そう言つて王慶源に笑いかけると、王慶源は手を振り上げて私を撃つようなそぶりを示し、

「残念ながら、貴公は俗臭かんがん芬々、とてもじゃないが仙界に連れて昇る勇氣は私にはありませんな。麻姑まこの長い爪で搔いてもらったらさぞや気持ちよかろうと、そんなろくでもないことばかりを思つて、びしばし鞭で打たれて終わりでありましたよう」

ここのやりとりには、また少し説明が必要です。

義兄の王道矩が得意とする話の一つに、王遠おうえんという大昔の仙人がいました。蔡経というのは俗界に生きるごく平凡な人でした。それでも王遠は蔡経には仙人に

なる素質があると見て、しばしばその家に遊びに来ていました。ある日、王遠はいつものように蔡経の家に来ると、若い女性の仙人である麻姑を呼び、そこで樂しげに語り合いました。蔡経は脇から、麻姑の爪が長く伸びているのを見て、あれで背中を搔いてもらったさぞ気持ちがいいだろうと想像しました。王遠はその心をすぐに見抜き、「この俗物め」と、怒って鞭でしたたかに打ちました。それでも蔡経は許され、後に王遠に従って仙人になったのでした。

そのことを踏まえた王慶源の戯れの言葉に、楊君素は、

「王遠の物語に、私と同じ楊という姓の者は登場しなかったように思いますが、私としてはせいぜいのところ蔡経の隣人の陳尉ちんじゆうのようになれたらと願いますな。

陳尉は、王遠に『貴様なんぞは到底仙界には連れて行けない。このまじないふだの符ふだでも使つて、せいぜいひと財産を築くがよい』と言われたわけで、貴公のお祖父様じいさまに

はこっぴどく叱られるかもわかりませんが、いかさまのお符でもいいから授かって、大いに儲けたいものですな」

そのような冗談を言い合って苗木を植えて青神県に別れを告げたのでした。

その後、荔子は大きく成長しても、故郷に帰ることができないままに歳月は流れ、22年後に私が杭州こうしゅうにいたとき、青神県から王の一族の者が訪ね来て、半年ほど滞在しました。いざその者が帰郷するに際し、このときの別れを思い出し、蔡子華、王慶源、楊君素の3人に向けて次のような詩を書き送りました。

私が東に旅立った時、

手ずから荔子を植えて、

私が帰るのを待っているからと、

皆様方は見送って下さいました。

それから、荔子は赤い実をたくさんにつけ、

その一方で、私の髪はすっかり白くなりました。

ここ江南の地で、私はいまも帰らぬ客として過ごし、

ここ江南の地は、いま春も終わりの最も水の多い季節となっています。

西湖せいこの春の水に船を浮かべれば、望郷の念は尽きることなく湧き上がり、

遙か青神県のあの川べりの道が想い浮かんでまいります。

そちらでは白魚と筍が旬でありますよう。

銭を惜しむことなくそれらを買求め、

白い髪に白い髭の三老人が集まって楽しくされておられますよう。

昔からの馴染の方々の内で、いまも元気でいるのは誰と誰でしょうか。

もはや古い師に富貴や寿命を占ってもらってもない老人となり、

いよいよ背に手が届きにくくなり、

麻姑に背中を搔いてもらいたいとひたすらに願うのみです。

——背中がかゆいんだったら、百均で孫の手を買ったらいいんじゃないの……というくだらないコメントをいうのはなしにして、今夜は最初から最後まで故郷つながりの話だったね。ボクとしても、故郷の意味を考えるいいきっかけになったんだけど。

ⓧ 外はどうやら雨も風もおさまったようですから、これからあそこに行ってみ

ませんか。今夜から3日間、ハロウインの仮装をして行くと、ラーメンに餃子を

付けてくれるのですよ。ここに用意をして来た物があるのですが。ほら、あなたの分もあります。

——ほんと？ まさかトバー君までハロウインの仮装をするとは思わなかった。いつもはプラプラ手ぶらなのに、大きな手提げ袋を持ってきたから、どうしたんだろうなあって思っただけだ。で、どんな仮装をするの？ 悪魔？ 地獄の閻魔様かな？ そうだよね、トバー君は軟弱なんで閻魔様にしてもらえなかったから、この際、閻魔様になろうってことだよね。

Ⓣ 私に最も似合うのは仙人でありましょう。あなたには、ほれ、この長い爪を付けて、麻姑に扮していただくこうと思っています。

——麻姑って、女の仙人だよ。それは勘弁せんちゃんだなあ。逆だったらいいよ。トーバー君が麻姑になればいいじゃん。そんで、ラーメンに餃子が付くってどの店？

㊦ もちろんねずみ男の店です。

——ゲッ。あそこに餃子なんてあったっけ？ 極太千歳飴のメンに、餃子はきつと、すあまみたいなネチヨネチヨのヤツだったりする？ それはよそうよ……。

* * *

果たしてイノ君がこの後、仮装して店に行つたかどうかは聞いていない。そのラーメン屋がどこにあるのかもまだ確かめていない。よほどまずいのだろうか。ど、そういう店がつぶれずにあるというのがこの町の懐の深さを示しているのだろうか。